

# F/T09

フェスティバル / トーキョー

PRESS RELEASE

## 『雲。家。』

構成・演出：高山明 (Port B)

作：エルフリーデ・イエリネク / 翻訳：林立騎

3月4日(水)～7日(土)

於：にしすがも創造舎



(c) Kohei Matsushima

ノーベル賞作家、エルフリーデ・イエリネクによる僅か 40 ページの戯曲『雲。家。』。

「家」を探し求める「わたしたち」のモノローグが紡がれる中、  
舞台上に浮かび上がるサンシャイン 60…『サンシャイン 63』と表裏の関係にある  
Port B の 代表作、バージョンアップしての待望の再演。

お問合せ：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

〒170-0001 東京都豊島区西巢鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207

制作担当：クラウトハイム・ウルリケ u-krautheim@anj.or.jp F/T 広報担当：及位(のぞき)、ハツセル toiwase@anj.or.jp

## ／ 作品について

### 『サンシャイン 63』、そして『雲。家。』。Port B による 2 作品再創造・同時再演。

舞台公演にとどまらず、演劇を越境する試みで注目を集める高山明と Port B (ポルト・ビー)。これまでの活動の集大成として、フェスティバル/トーキョーで代表作 2 作品を再創造・同時再演する。池袋を舞台とするツアー・パフォーマンス『サンシャイン 63』と表裏の関係にあるのは、ノーベル賞作家イエリネクの『雲。家。』。「家」を探し求める「わたしたち」のモノローグが紡がれる中、舞台上に浮かび上がるサンシャイン 60…。国家、民族、歴史、大地、故郷、身体、生と死。「わたしたち」という在り方を批判的に問う言葉は舞台上に現れては消える声となり、知覚と記憶を強く揺さぶり続ける。2007 年 3 月の東京国際芸術祭で初演された Port B の代表作、バージョンアップしての待望の再演！

### 『雲。家。』(独題: Wolken. Heim. (Clouds. Home.) / 1988 年)

2004 年にノーベル文学賞を受賞したオーストリアの作家、エルフリーデ・イエリネク。彼女が 1988 年に発表した僅か 40 ページのテキスト『雲。家。』は、通常の意味での「戯曲」からはかけ離れている。言葉のほとんどは高名な詩人や哲学者の引用で織り成され、登場人物や場所の指定、作中のト書きは一切なく、ただ「わたしたち」という主語をもつ言葉が 24 に区切られた断片をひとつまたひとつと紡ぎ出すだけ。その「わたしたち」が狂ったように追求するのは、「わたしたち」の「家」はどこにあるのかということ。人種差別、外国人排斥、愛国心、祖国のための死といったテーマに触れるそのテキストは、「わたしたち」という言葉によって、人間の集団、共同体の在り方への問いを投げかける。

*最初から最後までひたすらイエリネクのテキストを読み上げる女性パフォーマーの存在感は圧倒的だ。荘重に空間を満たしていく「わたしたち」「大地」「家」「民族」「帝国」の賛歌は、しかし、その〈声〉のパフォーマティブな強度ゆえに、字義通りの意味を存在論的な倍音により揺さぶり、もう一つの〈大地〉、もう一つの〈家〉、もう一つの〈わたしたち〉へと、連れ去っていく。〈声〉の力への陶酔が、存在の存在への開かれへと覚醒していく。*

熊倉敬聡(慶應義塾大学教授／文化実践論)

## ／ 演出ノート

### 『雲。家。』 演出ノート

高山明 (Port B 主宰)

#### — 翻訳不可能性という可能性 —

イェリネク作品の歴史的演出で名高いヨッシ・ヴィーラー(スイス)から、「日本語でのイェリネク作品上演は不可能だろう」という話を聞いた。言葉とテーマがあまりに深く結びついており、翻訳ではその結びつきが出せないというのが理由であった。しかしその翻訳不可能性のなかにこそ、逆説的に、日本語でしか実現しえないイェリネク作品の上演可能性が隠されているのではないか。言語(=ドイツ語)の問題それ自体を扱った作品『雲。家。』に取り組むのが最も「不可能」な、ということは最も「可能性に満ちた」試みになるのではないか。こうした問いが私に『雲。家。』への興味を掻き立てた。

#### — “母語”の暴力、“言葉”の希望 —

『雲。家。』でテーマ化されている言語の問題を“母語”と捉え、それを“家”に置き換えれば、母語を話さない者を他民族として“家”の外に排除する側面と、他民族にその言語を母語として強要することで同一民族に改造、“家”の内へと同化する側面が見えてくる。“母語”というものが持つこうした暴力的側面を外国語教育の問題に絡め可視化する一方で、そうした側面を癒すのもまた“母語”なのかも知れないというその力もまた具現化した。しかし“母語”というものが人間にとって本当の“家”になりうるのかという点について、『雲。家。』は痛烈な否を突きつけている。

結局のところ人間は“母語”という“家”に収まりきることはなく、大地に晒し者として残るのが人間の条件である。だが、逆にイェリネクはそこにこそ微かではあれ“言葉”への、“母語”に対する以上の希望を見ているように思われる。ここに翻訳不可能性を逆手に取るチャンスがあるのではないか。

#### — “言葉”の夢 —

今回私たちが取り組み、最終的に声にするのはドイツ語から翻訳された日本語であり、それもドイツ語を反映させ敢えて変形を被るよう訳された、いわば奇形の日本語である。この意味で、日本語とはいえ安住できるような“家”ではないし、最初から内に亀裂を孕むがゆえの可能性に富んでいる。日本語で上演することによって、『雲。家。』に託された微かな希望を掬い上げ、“言葉”が夢見るような瞬間を現出させることが出来ればと考えている。

## /アーティスト・プロフィール

### 構成・演出：高山明 Akira Takayama



1969 年生まれ。1994 年より渡欧。演出助手として研鑽を重ね、多数の舞台、オペラ等に携わりながら演出・戯曲執筆を行う。帰国後 2002 年ユニット Port B (ポルト・ビー) を結成。演劇を専門としない表現者たちとの共同作業によって、既存の演劇の枠組を超えた前衛的な作品を次々と発表。創作の拠点「にしすがも創造舎」がある池袋・巣鴨一体では、サンシャイン 60 が象徴する日本戦後史を巡る 3 部作として、舞台作品『雲。家。』、ツアーパフォーマンス『サンシャイン 62』、演劇的インスタレーション『荒地』を発表し、演劇界のみならず現代アートの文脈からも大きな注目を集めた。現実の都市や社会に存在する記憶や風景、メディアなどを引用し再構成しながら作品化する手法は、「来るべきもの」としての現代演劇の可能性を提示する試みとして、国内はもとより海外のフェスティバルや美術展でも大きな注目と期待を集めている。

### Port B (ポルト・ビー) <http://portb.net/>

2002 年東京にて結成。高山明がドイツで培った演出メソッドを叩き台に、演劇以外の活動に携わるアーティストや職人を中心に演劇的実験を繰り返す。

活動は多岐にわたる。「演劇(的)テキスト」に取り組んだ舞台には、ブレヒトの第一詩集『家庭用説教集』を素材とした『シアター X・ブレヒト演劇祭における 10 月 1 日/2 日の約 1 時間 20 分』(03 年)、H. ミュラー『ホラティイ人』(05 年)、E. シュレーフ『ニーチェ』(06 年)、E. イェリネク『雲。家。』(07 年)がある。

他方、高島平をフィールドワークし団地で暮らす人達を舞台に招き入れた『Museum: Zero Hour ～J.L. ボルヘスと都市の記憶～』(04 年)や、隅田川をフィールドワークした成果と謡曲『隅田川』をクロスさせた

『Re:Re:Re:place ～隅田川と古隅田川の行方(不明)～』(05 年)はドキュメンタリー性の強い舞台である。

近年は更に、実際の都市をインスタレーション化する“ツアー・パフォーマンス”なるものを企画。「おばあちゃん原宿」巣鴨地蔵通りを舞台にした『一方通行路』(06 年)、東京観光の代名詞はとバスを使った『東京/オリンピック』(07 年)、池袋サンシャイン 60 の周囲を 5 人一組の参加者が巡った『サンシャイン 62』(08 年)は、各種メディアに取り上げられるなど好評を博した。

また、“演劇的インスタレーション”と称される作品の系譜に、旧豊島区立中央図書館における『荒地』(08 年)、旧ソウル駅駅舎を使った『東西南北』(08 年)、茨城県取手市井野団地での『団地大図鑑』(08 年)があり、これらは現代美術の領域においても注目を集めた。

いずれの活動においても「演劇とは何か」という問いが根底にあり、「きたるべきもの」としての現代演劇を追求している。

## 高山明 および PortB 作品上演歴

- 2003年10月 「シアターX プレヒト的プレヒト演劇祭における10月1日/2日の約1時間20分」構成・演出  
(シアターX)
- 2004年5月 「ベルリン演劇祭・若手演劇人の為の国際フォーラム」参加
- 2004年9月 『Museum: Zero Hour ～J.L.ボルヘスと都市の記憶～』構成・演出(シアターX)
- 2004年12月 インスタレーション『inter-view』制作(ギャラリー・アップリンク)
- 2005年3月 H.ミュラー作『ホラティ人』構成・演出(シアターX)
- 2005年5月 ベルリン「Intransit 演劇祭」より招聘、パフォーマンス作品の構成・演出(世界文化の家)
- 2005年12月 『Re:Re:Re: place ～隅田川と古隅田川の行方(不明)～』構成・演出(アサヒ・アートスクア)
- 2006年3月 E.シュレーフ作『ニーチェ』演出(BankArt NYK ホール)
- 2006年11月 ツアー・パフォーマンス『一方通行路 ～サルタヒコへの旅～』構成・演出(巣鴨地藏通商店街)
- 2007年3月 東京国際芸術祭にてE.イェリネク作『雲。家。』演出(にしすがも創造舎特設会場)
- 2007年11月 はとバス・ツアー・パフォーマンス『東京／オリンピック』構成・演出(東京全域)
- 2007年3月 東京国際芸術祭にて『東京／オリンピック』再演
- 2008年3月 ツアー・パフォーマンス『サンシャイン62』構成・演出(池袋周辺地域)
- 2008年6月 演劇的インスタレーション『荒地』構成・演出(旧豊島区立中央図書館)
- 2008年10月 ソウルの現代美術展「プラットフォーム」にてインスタレーション『東西南北』制作(旧ソウル駅)
- 2008年10月 「取手アートプロジェクト」にてインスタレーション『団地大図鑑』制作(取手井野団地)

## 曖昧な日本の「わたしたち」

藤原敏史(映画作家)

「わたしたち」という言葉が気持ち悪くなるほど執拗に繰り返される。ドイツ語で書かれ、翻訳不能と言われるほどにドイツ語的な、つまりは主語・主体をはっきりさせなくては文章にならないテキストを、確信犯で強引に日本語にすると、主語がなくとも文章が成立する日本語なら曖昧で済まされる主体が、否応なしに明示されてしまう。

この「わたしたち」の繰り返しは、日本語としてはどう考えても違和感があって不自然に響くはずだ。だが、「自然な日本語」を装うこと自体が、この芝居の主題と性質上、そもそも拒絶されなければならない。

むしろ聞き流されることなく観客の意識の流れにくさびを打ち込むためには、この芝居の日本語は不自然にこそ響かなければならない。そもそも「自然な日本語」とは日本語を母語にする日本人にとって定義しようもなく、無意識の領域に属する感覚に左右されている。だからこそ、言語の機能を意識化するためには、不自然なまでに杓子定規の文法によって、不自然に響かなくてはならないのだ。

「わたしたちは」「わたしたちの」、この一人称複数が国家民族を指し示すとき、その言葉が明瞭に発語されればされるほど、その「わたしたち」の定義がまったく漠然として曖昧なことが逆に際立つ。あたかもその枠組みと定義の空虚さを覆い隠すように、「わたしたち」という存在しない主体が呪文のように繰り返され、刷り込まれて行くかのようにも思える。Port-B による日本語版『雲。家。』は、主体が曖昧であるが故に凶暴に暴走した負の歴史を持つ日本的なナショナリズムを、主体つまり主語が構造上は明確なテキストによってあぶり出そうとしている。

分かり易いたとえを用いるならば、日本のナショナリズムをめぐる日本語的に曖昧なテキストを強引に印欧言語に翻訳し、それを再び強引に日本語に訳し直した言葉を聞かされている感覚とでも言うべきだろうか。元々の日本語では「日本人」だったり「大和魂」だったり。「進め一億火の玉だ」だって「一億」が主体なのか、命令形なのかすら定かでない。「欲しがりません勝つまでは」だって「誰が」欲しがらないのかよく分からない。だからこそ「誰が」を考えずにすんなりと広まったのだろうが、「わたしたちは欲しがりません」と言い換えたとき、「わたしたちは」とは誰なのか、聞いている「わたし」あるいは「僕」が含まれるのかを意識されざるを得ない。それも棒読み調ですらないほど特徴の曖昧な、しかもマッチョ国家主義のステレオタイプからあえてズラした女性の声で「わたしたち」が日本語で繰り返されるとき、「お国のため」なのか「わたしたち日本“人”」のためなのかも定かでなかった日本的ナショナリズムの構造が、逆説的に照射される。

そして A 級戦犯 12 名の処刑された場にそびえ立つ巨大な直方体、サンシャインである。近代化の象徴というイデオロギーを装って建てられたはずが、その形は巨大な墓標にも見える。A 級戦犯といえば靖国神社が話題になるが、戦死者でもないし二名は文民、軍人の多くだって東条首相をはじめ、軍内部の役割でなく政治家として行ったことで処断されたのだから、本来は靖国に属するはずがない。なのになぜか靖国の争乱の元になっている一方で、えらく目立つ高層ビルなのにサンシャインの歴史的な意味を、誰も意識していない。

曖昧と忘却、そこに生まれるズレ——あそこまで失敗してボロ負けしながら日本的ナショナリズムはほとんど変質することなくなぜ生き延び続けてられたのか、そのメカニズムが作用する無意識こそが、日本語とドイツ語、

サンシャインと墓石の直方体という形状的な共通性のあいだの、表象と表象されるもののズレと亀裂から、意識化される。

藤原敏史（映画作家）

1970年横浜生まれ。東京とパリで育ち、早稲田大学文学部、南カリフォルニア大学映画テレビジョン学部で映画史、映画製作を学ぶ。1994年から映画批評を執筆。2002年、悪友の“イスラエルの山賊”ことアモス・ギタイにそそのかされ、映画『ケドマ』の撮影現場をものはずみで撮らされたドキュメンタリー『Independence: around the film Kedma a film by Amos Gitai』で監督デビュー。独創的なドキュメンタリー演出を続ける一方で、即興演出を駆使した初の劇映画『ぼくらはもう帰れない』を2006年ベルリン国際映画祭フォーラム部門で上映、世界的な注目を集める。

## ／ キャスト/スタッフ

作	エルフリーデ・イエリネク
翻訳	林立騎
構成・演出	高山明
出演	暁子猫
映像	宇賀神雅裕
舞台監督	清水義幸
照明	江連亜花里
技術監督	井上達夫
制作・ドラマトルク	林立騎
製作(初演)	東京国際芸術祭 2007
翻訳協力	GOETHE-INSTITUT JAPAN ドイツ文化センター
主催	フェスティバル/トーキョー



## 公演/チケット情報

会場	にしすがも創造舎
チケット料金	全席自由 一般 4,000 円、学生 3,000 円(要学生証提示) 高校生以下 1,000 円
お取扱い	フェスティバル/トーキョー(HP のみ)、ぷれいす(電話のみ)、 電子チケットぴあ(Pコード:391-401)、イープラス

### 公演スケジュール

3/4 wed	3/5 thu	3/6 fri	3/7 sat
19:30	19:30	19:30	17:00

### F/Tパフォーマンス チケット 2008 年 12 月 18 日(木)前売開始 ※F/T 参加作品は対象外

#### ■チケット取扱

フェスティバル/トーキョー(HP のみ) <http://festival-tokyo.jp>

ぷれいす(電話のみ) 03-5468-8113(平日 11:00-18:00)

電子チケットぴあ 0570-02-9999 (Pコード予約) <http://pia.jp/t> ※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

イープラス <http://eplus.jp> ※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

- ・指定席の場合、開演時間に遅れたお客様はご指定のお席にお座りになれない場合がございます。
- ・未就学児童のご入場はお断りさせていただきます。
- ・受付開始及び当日券の販売は開演 1 時間前、開場は 30 分前からとなります。
- ・チケットの払戻、観劇日の変更はできません。
- ・チケット料金には消費税が含まれます。

#### F/Tパフォーマンスを、選んで観る。全部観る。誘って観る。学生も観る。

フェスティバル/トーキョーならではのお得なチケットでお楽しみください。 ※フェスティバル/トーキョー・ぷれいすのみ取扱い

◇F/T 回数券 **選んで観る!** ※お好きな演目を選んでご覧いただけます。(『サンシャイン 63』は対象外)

3 演目 ¥10,000 (¥3,333/枚)、5 演目 ¥15,000 (¥3,000/枚)

◇F/T パス(13 演目) **全部観る!** ※全ての演目をご覧になれます。(『サンシャイン 63』は対象外)

¥30,000(¥2,300/枚)

#### ※F/T 回数券、F/T パス(13 演目)のお取扱いについて

- ・2 月 13 日(金)18:00 まで販売(限定枚数)
- ・観劇演目・日時が未定でも購入できます。
- ・購入後は演目・日時のご予約を受け付けます。
- ・予約なしでも当日ご入場出来ます。但し、満席時はご入場頂けない場合がございます。
- ・確実にご覧頂くためには演目・日時予約をお勧めいたします。
- ・回数券・パスはご本人様のみ有効です。

#### ◇ペアチケット **誘って観る!**

チケット 2 枚分の料金から 10%OFF でご購入頂けます。(例/¥4,500 × 2 枚 = ¥9,000 → ¥8,100)

※2 名同日時観劇のみお受けいたします。 ※当日券のご用意はございません。 ※『演劇/大学 09 春』は対象外です。

#### ◇学生料金 **学生も観る!**

学生 全演目 ¥3,000(要学生証提示) 高校生以下 全演目 ¥1,000

※東京芸術劇場中ホール公演は S 席 ※当日でもご購入できます。

◇Port B セット券(『雲。家。』『サンシャイン 63』) ¥6,400 (¥3,200/枚)

※ぷれいすのみ取扱 ※2 月 13 日(金)18:00 まで販売(限定枚数)

3 演目	¥10,000 (¥ 3,333/枚)	F/T パス	¥30,000 (¥ 2,300/枚)
5 演目	¥15,000 (¥ 3,000/枚)	ペアチケット	10% OFF

## **/ フェスティバル/トーキョー09 春 開催概要**

**名称** フェスティバル/トーキョー09 春  
Festival/Tokyo 09 spring

**会期・会場** 2009年2月26日(木)～3月29日(日)  
東京芸術劇場 中ホール 小ホール1・2  
あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)  
にしすがも創造舎

**プログラム** F/T パフォーマンス 14 演目  
F/T 参加作品 5 演目  
F/T プロジェクト(シンポジウム/ステーション/クルー)

**主催** 東京都  
財団法人東京都歴史文化財団  
フェスティバル/トーキョー実行委員会  
豊島区、財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

**共催** 社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター

**事業共催** 国際交流基金

**協賛** アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

**助成** 財団法人アサヒビール芸術文化財団

**後援** 外務省、社団法人日本芸能実演家団体協議会、社団法人日本劇団協議会

**協力** 東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、  
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、社団法人豊島法人会

**宣伝協力** 株式会社ポスターハリス・カンパニー

平成20年度文化庁国際芸術交流支援事業

**提携事業** 東京芸術見本市2009

## / 写真/クレジット一覧

### 『雲。家。』写真



(c) Kohei Matsushima



(c) Kohei Matsushima

「写真家のクレジット」を必ず併記してください



(c) Kohei Matsushima



### ポートレート 高山明



(c)不要